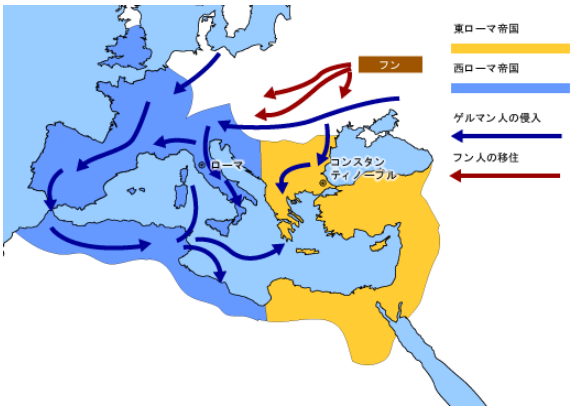
1. 中世西ヨーロッパ

1.1 ゲルマン民族の大移動

◇大移動の経緯

時代	移住地など
前 1 世紀頃まで	ゲルマン人はライン川、ドナウ川周辺までその領域を拡大していた。
4 世紀後半	アジア系遊牧民フン族が西進を開始し、ヨーロッパにあらわれゲルマン人を圧迫する。その結果、ゲルマン人は西に流れ、ローマ帝国へ流入することになる。
395 年	ローマ帝国が東西に分裂。
476 年	ゲルマン人が西ローマ帝国に侵入し、西ローマ帝国を滅ぼす。(古代終了)

青:ライン川　赤:ドナウ川



大移動の流れ

1.2 フランク王国

◇ゲルマン民族の大移動の後

ゲルマン民族の大移動後、ゲルマン人は多くの王国を建てたが、ほとんどが滅んだ。

◇フランク王国の建国(メロヴィング朝の開始)

481 年、クローヴィスがメロヴィング朝を開き、全フランク族を統一した。これがフランク王国の始まりである。※1

フランク王国初期の領土(481 年)

◇キリスト教との関係

クローヴィスはアタナシウス派※2 に改宗しローマ帝国との結びつきを強め、ローマ文化を積極的に取り入れ、王国に基礎を固めた。

◇カロリング朝の開始(751 年～987 年)

クローヴィスの死後、メロヴィング朝は内紛が続き王国の実権は次第に宮宰※3 をつとめるカロリング家に移行していった。そのきっかけがトゥール・ポワティエの戦い(732 年)である。メロヴィング朝の宮宰であったカール・マルテスは、イベリア半島から侵入してきたイスラム勢力※4 を撃破した。これを受け、751 年にカール・マルテスの子小ピピン(ピピン 3 世)がメロヴィング朝を廃してカロリング朝を創始した。

◇ローマ教皇領の起原

小ピピンは北イタリアのロンバルド王国を破って(754 年)、ローマ教会に領地を寄進した。

◇カール 1 世即位(800 年)

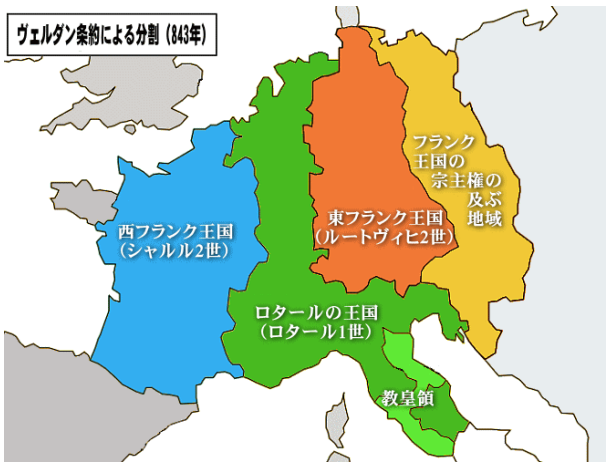
小ピピンの子カール 1 世はロンバルド王国を滅ぼし(774 年)、西ヨーロッパの大部分をフランク王国の支配下に置いた。そこでローマ教皇レオ 3 世はカール 1 世に帝冠を授けた。この結果、ローマ=カトリック教会がコンスタンティノープルの影響下から離れて独自に勢力圏を構築することになった。※5

ロンバルド王国の場所

800 年頃のフランク王国領

◇フランク王国の分裂

時代	出来事
814 年	カール 1 世が死去し、異民族に侵入されフランク王国は弱体化した。
843 年	ヴェルダン条約によって、フランク王国が西フランク、中部フランク、東フランクに分裂し、今のフランス、イタリア、ドイツの原型が作られた。
870 年	メルセン条約によって、中部フランクが東フランク、西フランク、イタリアに分裂した。



ヴェルダン条約後の領域

メルセン条約後の領域

1.3 神聖ローマ帝国

東フランク王国(ドイツ)では、諸侯の間で王を選ぶ選挙王制がとられ、919 年以降、ザクセン家が存続した。

◇神聖ローマ帝国の誕生(962 年)

ザクセン家のオットー1 世はレヒフェルトの戦い※6(955 年)やイタリアに遠征してローマ教皇を助けたことにより、教皇ヨハネス 12 世からローマ皇帝の冠を授けられた。これが神聖ローマ帝国の起原となった。

1.4 フランスのカペー朝の始まり

◇カロリング朝の断絶

987 年まで、西フランク王国ではカロリング朝が存続したがルイ 5 世の死をもって男系王位継承が途絶え、カロリング朝は断絶した。

◇カペー朝の開始

カロリング家の断絶後、ノルマン人の侵入に対してパリ防衛に活躍したパリ伯のユーグ・カペーが王に推戴され、カペー朝が成立した。

1.5 ローマカトリック教会

◇東西教会の分裂

キリスト教はローマ・コンスタンティノープル・イェルサレム等 5 都市に置かれたが、特に首都であるローマ・コンスタンティノープルの 2 教会の勢力が強く、中世において勢力争いが行われていた。(※5 参照)

◇聖職叙任闘争

叙任権を巡り神聖ローマ皇帝とローマ教皇の争いが表面化する。1077 年、ローマ教皇グレゴリウス 7 世が神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世を破門する(カノッサの屈辱※7)。これは教皇権が政権を屈服させたことを意味した。その後、イノケンティウス 3 世らのもとで、教皇権は最大になった。

※1 現在のフランス(パリ)の位置である。

※2 神・イエス・精霊を 1 つのものと信じる「三位一体」説をとる。(神≒イエス)
それに対して、イエスを神の創造物としてとらえるのがアリウス派である。ゲルマン人はアリウス派が多かった。

※3 職名ないし官職名。読み方は「きゅうさい」。

※4 当時のイベリア半島でのイスラム勢力→→→→→→→→→→→

※5 当時ローマ教会はコンスタンティノープル教会との間で聖像崇拝論争が続いていた。コンスタンティノープル教会がイスラムとの接触により聖像の崇拝を排撃したのに対しローマ教会は聖像崇拝を肯定した。726 年にビザンティン(東ローマ)皇帝レオン 3 世は聖像崇拝禁止令を出し、より東西は分裂していた。

※6 ザクセン家のオットー1 世が東方から侵入するマジャール人を破った。

※7 皇帝はイタリアのカノッサで教皇に謝罪したことからの名。

2. 中世東ヨーロッパ世界

2.1 ビザンティン帝国

◇ビザンティン(東ローマ)帝国形成のきっかけ

時代	出来事
476 年	テオドシウス帝の死後、ローマ帝国は東西に分裂し、西ローマは滅亡。

東ローマは西ローマ帝国滅亡後の西ヨーロッパとは異なる独自の世界を生み出した。これが東ローマ帝国である。東ローマ帝国は、首都をコンスタンティノープル(現在のイスタンブール)の旧名ビザンティウムにちなんで、ビザンティン帝国とよばれる。

476 年の東ローマ帝国

◇東ローマ(ビザンティン)帝国の政治・経済体制

6 世紀半ばのユスティニアヌスは「ローマ法大全」を編纂させたり、養蚕業をおこすなど帝国の政治・経済体制を整備した。

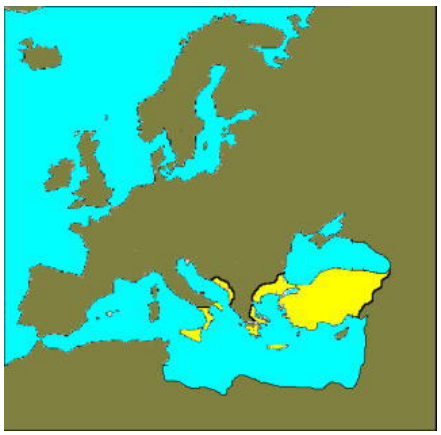
◇ササン朝ペルシアとの対立

ビザンティン(東ローマ)帝国はイタリア・北アフリカのゲルマン人の国口を滅ぼして地中海周辺の旧ローマ帝国領をほぼ回復したが当時全盛期を迎えていたササン朝ペルシアと対立し、激しい抗争を繰り返した。

2.2 ユスティニアヌス帝死後のビザンティン帝国

◇勢力範囲の縮小

ユスティニアヌス帝の死後、各地で反乱が起こり、国外でも、西方では回復したイタリアの大半をロンバルド族などに奪われ、東方ではササン朝ペルシアの侵入に悩まされた。7 世紀になると帝国の勢力範囲は縮小した。



8 世紀半ば頃のビザンティン帝国

◇ヘラクレイオス 1 世の政策

帝国の混乱の改革を行おうとしたのがヘラクレイオス 1 世で、国威を回復するために、屯田兵制や軍管区(テマ)制※1 をしいて、中央集権と軍事力強化を図ったが、この間にも領土は縮小し、8 世紀にはバルカン半島の一部と小アジアを残すだけとなった。

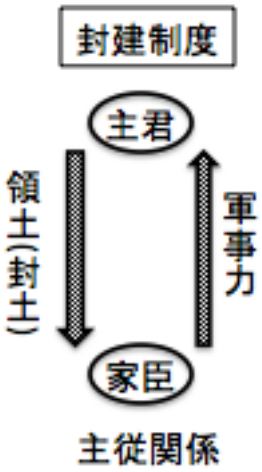
2.3 セルジューク トルコの台頭

11 世紀になると、東方ではセルジューク トルコが台頭して小アジアに進出し、これに対抗するために西ヨーロッパに援助を求めた。これがきっかけとなって、十字軍が始まったが(詳細 p.6)、第 4 回十字軍にコンスタンティノープルを奪われるなど衰退は続き、1453 年にオスマン帝国によってビザンティン帝国は滅ぼされた。

※1 皇帝の権力を維持し、封建化を防ごうとした。

3. 中世西ヨーロッパの社会制度

3.1 封建制度



封建制度

◇成立過程

ゲルマン民族大移動から 9 世紀(フランク王国分裂時期)にかけておこり、その起原はローマ帝政とゲルマン社会にあった。

◇制度

外敵に対する防衛の必要から、主君は家臣に領地(封土)を与えてその支配権を保護し、家臣は主君に忠誠を誓い、領地の大きさに応じて騎士として軍事力を提供した。この制度を封建制度という。

・ 家臣は領土の不輸・不入の権※1 をもつ(王権を排した課税権・裁判権を有していた)

◇西ヨーロッパでの実態

西ヨーロッパの中世は封建社会の時代であり、11～13 世紀がその最盛期であった。国王はこの主従関係の頂点に立つ者であるが、国内の土地支配権を臣下に与えているため、王権は弱体であった。

◇多重権力状態

中世の西ヨーロッパは一人の権力者(例えば国王)で統治をすることが不可能で、国王・諸侯・教会がお互いに権力を補い合う関係が中世(封建制)の特徴である。

3.2 荘園制度

◇荘園とは

領主の領土のことで、直営地・保有地・共有地からなる。

(1)直営地

領主が直接経営する。荘園内の農民に直営地を無償で耕作させた(賦役労働)。このような地位にある農民を農奴(のうど)といった。

(2)保有地

農民が自分で耕作し、保有分に対して領主に貢納の義務を負った。

(3)共有地

農民が共同で利用する共同地やその山林・野原など。

◇三圃制農業の普及と荘園制の解体

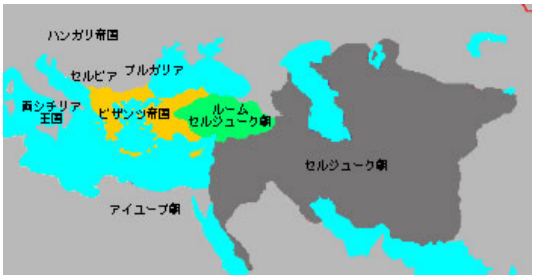
西ヨーロッパでは 1000 年頃から気候が温暖化し、三圃制農業※2 の普及などにより、農業生産・人口ともに増加した。この結果、荘園制の解体を促すことになった。

※1 主君(国王)の立ち入りを拒み(不入)、課税を拒む(不輸)することができた。

※2 農地 3 つに分け、1 つは春耕地(春蒔き、夏畑、秋収穫)、1 つは秋耕地(秋蒔き、冬畑、春収穫)、1 つは休耕地として 3 年周期で交代して利用する農業。

4. 十字軍

4.1 背景



セルジューク朝トルコの場所

11 世紀、西ヨーロッパでは、イエス・キリストの聖地イェルサレムを巡礼する風習が流行していた。しかし、セルジュークトルコがこの地方を支配するようになると、西ヨーロッパでは彼らが巡礼者を迫害していると噂が広まった。またセルジュークトルコは小アジアに進出しビザンティン帝国領を攻撃したため、ビザンティン皇帝アレクシオス 1 世がローマ教皇に援助を要請した。(1095 年)

4.2 十字軍の派遣

ローマ教皇ウルバヌス 2 世が 1095 年、クレルモン宗教会議を開き、「聖地回復」の十字軍を呼びかけ、ヨーロッパの国王・諸侯・騎士はこれにこたえて翌年第一回十字軍が派遣された。

4.3 十字軍の経過

回数	時代	展開
1	1096～1099 年	聖地イェルサレムを奪回に成功。イェルサレム王国を建設。
2	1147～1149 年	成果なし
	1187 年	エジプトにアイユーブ朝(1169～1291)を建国したサラディンにイェルサレム市を再び奪われた。
3	1189～1192 年	神聖ローマ皇帝フリードリヒ 1 世 サラディン　VS　フランス王フィリップ 2 世 イングランド王リチャード 1 世 イェルサレム奪回に失敗
4	1202～1204 年	ローマ教皇イノケンティウス 3 世の提唱。ヴェネティア商人の要求でコンスタンティノープルを占領し、ラテン帝国(1204～1261 年)建設。
5	1228～1229 年	神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ 2 世が一時的にイェルサレム市の統治権を入手する。
6	1248～1254 年	エジプトへ進出するが、失敗に終わる
7	1270 年	北アフリカのチュリスへ遠征したが、失敗に終わる。

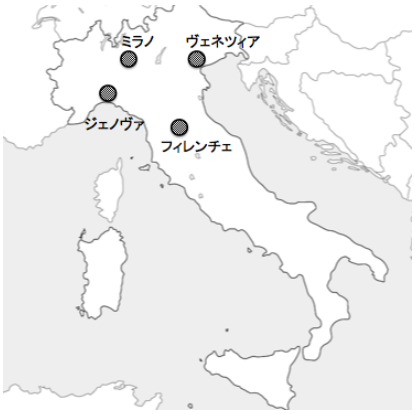
5. 都市の発達※1

5.1 地中海貿易

北イタリアでは、ヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ、ジェノヴァなどの金融・開港都市が東方貿易※2 で栄えた。北イタリアではロンバルディア同盟が結成された。

5.2 北海・バルト海貿易

北ドイツではリューベック、ハンブルク、ブレーメンなどが北海・バルト海貿易の中心となった。※3 バルト海沿岸ではハンザ同盟が結成された。



北イタリア

北ドイツ

西洋の海

5.3 地中海と北海・バルト海中間地域の発展

北イタリアと北ドイツとを結ぶ交通路に沿って、フランス東北部のシャンパーニュ地方は、2 つの商業圏の中間に位置し、トロアを中心とする 4 都市で年に 6 回の定期市が開催されていた。これをシャンパーニュの大市という。12～13 世紀にかけて大いに繁栄した。

5.4 ギルドの発展

発達した各地の都市は、国王や大諸侯に対する財政援助のかわりに通称の安全や商業独占の特許状や自治権が認められた。西欧の中世都市はこのような自由都市で、ギルドという同業者組合を形成した。このギルドは組合員以外の製造・販売などの競争を禁じ、市場を独占した。

※1 十字軍の輸送や補給を担った北イタリアの諸都市は、その軍事力を背景に東地中海貿易の独占に成功した。その結果、西ヨーロッパの交易が促進されて各地に都市が繁栄した。

※2 古代から中世にかけてヨーロッパ諸国が地中海を通じて中近東、アジア諸地域と行った貿易のこと。香辛料や絹織物を輸入して利益をあげた。

※3 塩・木材・海産物など主に生活必需品の取り引きによって栄えた。

6. イギリスとフランスによる百年戦争

6.1 イギリス

◇イングランドの成立過程

時代	出来事
5 世紀	ゲルマン民族の一派であるアングロ族・サクソン族が到来する。
8 世紀以降	ノール人・デーン人の侵入が相次ぐ
1066 年	フランス貴族ノルマンディー公(爵)ウィリアムがイングランドを征服し、イングランド王ウィリアム 1 世として即位し、ノルマン朝が開始(1066～1154 年)
1154 年	ノルマン朝が断絶し、プランタジネット朝※1 が開始(1154～1399 年)
1194 年	ジョン王(失地王※2)即位
1209 年	カンタベリ大司教をめぐり、ジョン王はインノケンティウス 3 世と対立し、破門された。
1214 年	フランス王(フィリップ 2 世)と争い、フランスの領土の大半を失う。(これを取り返そうとするのが 100 年戦争)
1215 年	マグナ=カルタ(大憲章)制定※3

6.2 フランス

◇教皇権の衰退

フランス国王フィリップ 4 世(カペー朝)がイギリスとの戦費捻出のため聖職者への課税をはかり、教皇ボニファティウス 8 世と対立した。1303 年にフィリップ 4 世はアナーニで教皇をとらえ憤死させた。これをアナーニ事件という。※4

◇ヴァロワ朝成立

1328 年、カペー朝が絶え、ヴァロワ朝が成立する。

6.3 百年戦争

1339～1453 年にイギリスとフランスはフランドル地方(フランス北部)を巡って、長期の戦乱が開幕した。一時イギリスが優位となるが、少女ジャンヌ・ダルクの活躍で最終的にフランスが勝利した。

※1 フランス貴族アンジュー伯がイギリス国王ヘンリ 2 世として即位した。

※2 領土を大幅に失ったため失地王と呼ばれた。

※3 国王が勝手に課税してはいけない等の王権の濫用を防ごうとした。しかしジョンの子ヘンリ 3 世がこの憲章を無視したため、シモンド=モンフォールらは議会を招集した。

※4 他にも教皇の衰退を示す出来事として、「教皇のバビロン補囚」、「教会大分裂」、「コンスタンツ公会議」がある。

7. 中世末期のヨーロッパ諸国

7.1 イギリス

◇ランカスター朝開始(1399～1461 年)

1399 年(百年戦争中)プランタジネット朝が断絶し、ランカスター朝が始まる。

◇ばら戦争(1455～1485 年)

百年戦争の敗北で貴族の不満が高まり、ランカスター家とヨーク家の王位継承争いがおこった。これをばら戦争という。ばら戦争後、ヨーク朝が開始される。(1461～1485 年)

◇テューダー朝開始(1485～1603 年)

戦後にはテューダー朝が開始され、絶対王政への道が開いた。

7.2 フランス

百年戦争後、シャルル 8 世の時に初めてフランス全土は国王のもとに統一され、絶対王政への道を踏み出した。

7.3 神聖ローマ帝国(ドイツ)

ザクセン朝→ザリエル朝→ホーエンシュタウフェン朝→ヴェルフェン朝など、皇帝家がめまぐるしく変わったため、皇帝権は強化されず、国内の諸侯勢力は比較的強かった。

◇大空位時代(1256～73 年)

実質的に皇帝が不在であった。

◇金印勅書(黄金文書)

1356 年カール 4 世(ルクセンブルク家)が発布したもので、7 人の選帝侯と国王選挙の手続きを確認。

7.4 イタリア

神聖ローマ帝国やフランスの介入で、国内は分裂状態。

8. 中世の教会堂建築

8.1 中世前半の教会建築

ロマネスク様式と呼ばれる。

石造天井を基本にラテン十字形の平面とローマ風の半円形状アーチを用いた厚い壁面をもつ重厚の趣がある。

代表例）ピサ大聖堂　クリュニー修道院　など。

8.2 中世後半の教会建築

ゴシック様式とよばれる。

高い尖塔とリブ(肋骨)、フライング・バットレス(飛控え)の 3 要素構造上の特徴である。

代表例）ケルン大聖堂　ノートルダム大聖堂　カンタベリ大聖堂